

調べてみれば

東日本大震災から半年たったある日、僕たちの学校に福島県から宏が転校してきました。



「山口宏さんは、東日本大震災で被災し、さらに原子力発電所の事故で避難しなければならなくなって、親戚がいるこの町へ引っ越してきました。みんな仲良くしよな。」と、先生が紹介されました。

僕は、席が隣になったこともあり、宏に学校のことやこの町のことなどいろいろ教えてあげました。宏も、お父さんが仕事の関係で福島県に残っていて寂しいことや、福島県の友だちと会いたいなあと思うこと、急いで避難したので自分が大切にしてたものを残したままなのでつらいこと、地震が起こる前の福島県での中学校生活が楽しかったことなどを話してくれました。

数日たったある日のことです。休み時間に宏がトイレに出て行ったとき、明が僕に話しかけてきました。

「なあ、なんで宏と仲良くできるんや。」

考えてもいなかった問いかけに、僕は、

「ええっ。」

とだけ言つて何も答えられませんでした。明は続けてこう言いました。

「だって、宏は福島県から来たんやで。体に悪い放射線をあびてるやろ。福島県の方が放射線を測定されている様子をテレビで見たことがあるけど、あれって体から放射線が出ているからやろ。何か僕らにも宏から放射線が飛んできそうやないか。」

その話を聞いていた浩二が、

「そんなわけないやろ。もしそうだとしたら、病院とかでも放射線は使われてるから、そこで働いてる人からも放射線が出ることになるで。僕も放射線のことにはよく知らんけど、人から出るなんて、聞いたことないわ。」

と言いました。

「聞いたことがなくても、絶対に出ないって言い切れるか。」と明が浩二に言い返しました。

「いや、それはよくわからへんけど…。」

そう言つて浩二は助けを求めするように僕の方を見ました。でも僕は何も言えずに黙っていました。

「なんで黙っているんや。やっぱりみんなも本

当は怖いんやろ。放射線って目に見えへんしな。僕は放射線が怖いわ。やっぱり、宏のそばには近よりたくないわ。」

明はそう言つて自分の席へ戻りました。浩二も、僕の方を見たま黙つて自分の席へ戻りました。帰ってきた宏は、いつもと違う様子を感じたのか、何だか寂しそうに一人窓から外をみていました。僕はその日、宏とは話をする事ができませんでした。



家に帰ってから、僕は母に学校での出来事を話し、どうしたらいいかと相談しました。母は、こう言いました。

「そう。でも、実際お母さんも放射線について詳しいことはわからへんなあ。一度放射線について自分で詳しく調べてみたら。」

夕食後、僕は放射線について、インターネットや本を使って調べてみました。文部科学省のホームページには、「知ることから始めよう放射線のいろいろ」という資料が掲載されていました。僕の知らないことばかりでした。

○放射線を出す能力を放射能といい、放射線を出す物質を放射性物質ということ。

○放射線とは、物質から出される粒子線または電子線のこと、エックス線やガンマ線などたくさん種類があること。

○放射線は、病院でのレントゲン撮影をはじめ、私たちの暮らしの中で利用されていること。

○大量の放射線は特殊な反応が起こったときだけ出るものであり、放射線を浴びた物質から大量の放射線が出ることはないこと。

○体の外から放射線を受けたことを原因として、人が放射線を出すようなことはなく、風邪のように人から人に伝染することはないこと。

つまり、宏から放射線が出るなんてことは絶対ないことがわかりました。また、「放射線が怖い。」というイメージが先行して、放射線が検出されず安全な農産物や海産物についても「風評被害」が発生し、多くの福島県の人々が辛い思いをし、苦しんでいることがわかりました。

一方で、福島県の子どもたちを支援しようとする取り組みが兵庫県内でもあることもわかりました。福島県の子どもたちの気持ちを少しでも和らげたいということで、夏休みを利用して、明石市や佐用町、姫路市に招待する取り組みです。佐用町では、町をあげて歓迎し、元の小学校との交流や、町の名物料理などのふるまいがあったということです。佐用町の人々は、「平成二十一年の佐用町の水害で全国の方々にお世話になった。その恩返しになればと思っています。」と話されていました。

僕は、放射線について調べたことやそこで感じたことを、学校で明や宏にどう話をしようか考えました。しばらくしてから、どんな話をするか、その内容をお母さんに相談しました。

「お母さん、あのな…。」



※…事実や正確な情報を伝えていない噂のために被害が生じること。